東近江総合医療センタートピックス

当院では最近こんな事がありました

「ちょっときてぇな講座」に行ってきました！

「ちょっときてぇな講座」とは、東近江市が提供している出張講座です。
これは市民の皆さんから「○○の学習をしたいので、ちょっときてぇな」というご要望に応じて、専門家などが講師として地域に出向いて学習する機会を提供するものです。当院もこの「ちょっときてぇな講座」に企業・公共機関の部として『みんなの健康教室』という講座をご用意しております。
6月26日（木）に今年度1件目の依頼にお伺いし、出張講座を行ってきました。
今回は薬剤師による「高齢者が気を付けたいお薬の話」、感染管理認定看護師による「高齢者と感染症～帯状疱疹を予防するには～」という2つのお話をさせていただきました。当日はたくさんの方にお集まりいただき、熱心に話に耳を傾けてくださるなど、改めて市民の皆様の健康に対する意識の高さを改めて感じることができました。
当院の提供しております「みんなの健康教室」では医師、看護師、コメディカル（薬剤師・理学療法士・栄養士など）が出向いて、健康に関するお話をさせていただきます。出前講座を希望される団体の方は、東近江市ホームページなどで詳細をご確認いただき、東近江市の生涯学習課までお申し込みください。

INFORMATION

当院からのお知らせや情報をお届けします。

乳がん検診のご案内

2023年3月にマンモグラフィ撮影装置が新しくなり、FUJI FILM社製『AMULET Innovality』が導入され稼働しています。女性の診療放射線技師が3名体制で撮影を行っており、病気の早期発見や装置の精度管理に努めております。検診マンモグラフィ撮影の専門認定を受けたスタッフも多数所属しており、安心安全に検査を受けていただけるよう日々努めております。（日本乳がん検診精度管理中央機構 マンモグラフィ検診施設・画像認定を取得しています。）
40歳以上の女性は2年に1度の乳がん検診を推奨されており、当院は滋賀県の乳がん検診指定医療機関となっています。滋賀県にお住まいで40歳以上の女性は、市から補助が出るため通常診療より安く検診を受けられますので、是非 当院にお電話または当院窓口にてご予約ください。

周辺地図

アクセス

公共交通機関ご利用の場合

電車▶バス

ＪＲ東海道本線「近江八幡駅」下車、近江鉄道に乗り換え「八日市駅」下車。
【近江鉄道バスご利用の場合】
「東近江総合医療センター」または「五智前」下車。
【コミュニティーバス(ちょこっとバス)ご利用の場合】
市原・沖野玉緒・南部御園線「東近江総合医療センター」下車。

高速バス

名神高速バス「名神八日市」下車、東方へ徒歩約5分。

車をご利用の場合

名神高速道路「八日市IC」から約2分。
「八日市IC」を出て1つ目の信号を右折し約300m先右側。

独立行政法人 国立病院機構
東近江総合医療センター
滋賀医科大学地域医療教育研究拠点病院

広報誌 つながり vol.055 2025年9月号
独立行政法人国立病院機構 東近江総合医療センター 広報委員会
〒527-8505 滋賀県東近江市五智町255　TEL：0748-22-3030(代表)　FAX：0748-23-3383

東近江総合医療センター 広報誌 Vol.055

つながり

クロストーク 包括的な医療補助を担う

「診療看護師」というチカラ

循環器内科部長
大西 正人
Masato Onishi

×

診療看護師
生田 一幸
Kazuyuki Ikuta

×

診療看護師
加地 祐哉
Yuya Kaji

病院からの
最新情報を
お届けします！

独立行政法人国立病院機構東近江総合医療センター

クロストーク 包括的な医療補助を担う

「診療看護師」というチカラ

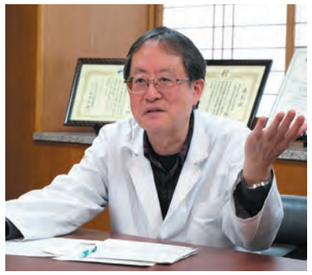
「診療看護師」という職名をご存知でしょうか。医師の指示のもと、初期診断などを含む特定の医療行為を自律的に行い、医師の負担軽減やチーム医療の促進に貢献する看護師です。今回は、当院に在籍する2名の診療看護師の活動内容やその効果について、循環器内科部長の大西先生を交えたクロストークでご紹介します。

医師の負担軽減や チーム医療促進に向けて活動

大西循環器内科部長（以下：敬称略）：今回は、当院で活躍している2名の診療看護師がどのような活動を行い、どのように診療に貢献してくれているのかをご紹介したいと思っています。

生田診療看護師（以下：敬称略）：診療看護師（JNP：Japanese Nurse Practitioner）は、2005年に制度化された比較的新しい認定職名ということもあって（JNPはNHOのみの呼称）、医療従事者の間でもあまり知られていないのが実情です。診療看護師とは、医師の指示のもと、特定の医療行為（特定行為）を自律的に行うことができる看護師を指します。似た制度に特定行為看護師があり、どちらも特定の医療行為を行えるのですが、教育課程や法的な位置づけ、実施可能な行為が異なります。特定行為看護師は公的な制度で、国が定めた21区分38行為に限り、特定行為研修を修了することで実施できるようになります。一方、診療看護師は日本NP教育大学院協議会が定める制度で、修士課程を修了する必要があります。そして認定後は、診察や初期診断、処方代行など、より包括的な診療補助を行える点が大きな特徴です。

加地診療看護師（以下：敬称略）：診療看護師の認定を受けるためには、まず看護師として5年以上の臨床経験が必要です。そして、日本NP教育大学院協議会が認める教育課程をもった大学院で2年間の修士課程を修了し、NP資格認定試験に合格すると診療看護師に認定されます。



大西：2024月時点での診療看護師の人数は、全国で984名（プライマリケア領域225名、クリティカルケア領域759名）です。まだ少ないものの着実に増えており、注目を集めつつあります。こうした背景には、医師不足や医師の働き方改革、チーム医療の促進などの課題が関係しています。当院でも、私が所属する循環器内科を例に挙げると、5年前までは医師2名体制だったので、一人が外来を担当し、もう一人が緊急対応にあたっている際には、どうしても病棟での対応にタイムラグが生じていましたが、診療看護師の生田さんが加わってくれたおかげで大幅に改善されました。

医師の思考プロセスを学び 日々の活動に活かす

生田：私が診療看護師を目指したのは、当時の看護部長に勧めていただいたことがきっかけでした。最初は修士号を取れることに惹かれたのですが（笑）、診療看護師として活動することで医師をはじめとするスタッフのみなさんの負担を少しでも減らし、質の高い診療に貢献したいという気持ちが強くなっていきました。

加地：私は、生田さんが活動されている姿を見て、自分も診療看護師資格の認定を受けてスタッフのみなさんや患者さんの力になりたいと思いました。また、自分自身のキャリアをステップアップさせるために模索していた時期だったことも理由のひとつです。

大西：生田さんは認定を受ける前から知識が豊富で、手技も優れていました。加地さんもケアに関して積極的に提案してくれるなど、心強い存在でした。看護部長もそういったところを評価して推薦されたのでしょう。

生田：それは初耳です。そういうことはモチベーションアップにつながるので、もっと早く言ってください（笑）。でも、看護部長から声をかけていただいたことはとても嬉しかったですし、期待に応えたいと思いました。

加地：大学院で勉強した2年間では壁にぶつかることもありましたけど、それだけに修士課程を修了したときは達成感が込み上げてきて、涙が出ました。

大西：働き盛りの時期に2年間現場を離れるのは、看護師本人にとっても病院にとっても大きな影響があるので決断するのは簡単ではないでしょう。ただ、中長期的なスパンで見れば、必ずプラスになると思います。

生田：大学院では医師の方々に指導していただき、医師がどのように考えて状況判断や診断しているのかという、思考プロセスを理解できたことが大きな収穫になりました。同じ患者さんに関わっていても、医師と看護師では着目点が異なり、最適だと考える対応も違うケースがあります。以前はこうした場合、「どうしてなんだろう」と疑問に感じていましたが、医師の思考プロセスがわかったことで、納得したうえで医療行為や看護を行えるようになりました。

加地：そうですね。知識を身につけることだけでも充分プラスになるのですが、医師の考え方やアプローチを理解することで、身につけた知識をどのように実践に結びつけるかを考えるようになりました。今まで点だった知識がつながって線になり、応用力がついたイメージです。これは、医療行為を行ううえでとても重要なことだと思います。

大西：スムーズに意思疎通ができるのは、医師にとってもありがたいことです。お二人は、こちらの意図を的確にくみ取ってくれるので安心感があり、実際に診療面でも貢献してくれています。

特定行為の実施に加えて 診療科内のパイプ役に

生田：現在、私は循環器内科で活動しており、加地さんは資格を取得して1年目なので、外科で研修中です。診療看護師が行う医療行為については、配属される診療科によって大きく異なります。循環器内科でいえば、医師の指示のもと、動脈血採血やカテコラミンという血圧をコントロールする薬の調整などをすることが多いです。また、他の診療科の先生からPICC（末梢留置型中心静脈カテーテル）を依頼されることもあります。

加地：外科は、ドレーンの処置を行うことが多いですね。

大西：心臓カテーテル検査や薬の代行処方など、これまで医師しかできなかった業務を担ってもらえるようになり、大変助かっています。しかも優秀。こんな言い方をすると語弊があるかもしれませんが、大半の研修医よりも技術は高いんです。それは、豊富な臨床経験を積んだうえで、大学院でしっかりと学んでいることが大きいと思います。おかげで質を維持しながら効率的に診療が行えるようなり、医師だけでなく病棟看護師の負担も軽減されたのではないでしょうか。

生田：そう言っていただけると嬉しいです。普段の業務では、診療科全体のことを考えて動くように意識しています。自分ができる医療行為を多くこなすことよりも、診療科、ひいては病院のなかで、いかに機能するかを重視しています。

大西：そうしたなかで看護師ならではの強みも発揮してくれている。たとえば、病棟看護師やコメディカルスタッフの方々が質問や相談をしたいときに迅速に対応してくれるんです。やっぱり、医師よりも看護師の方が聞きやすいですから。特に医師が外来を担当しているときや、緊急対応をしているときはどうしても躊躇すると思います。

生田：はい、確実に看護師の方が敷居は低いと思います（笑）。単に医療行為を行うだけでなく、円滑で質の高い診療を行うためのパイプ役になれたらいいなと思っています。

加地：私はまだ研修中ですので、まずは外科で経験を積んで、手術に携わるスタッフのみなさんや患者さんの力になれるように成長することが今の目標です。

生田：今後は院内の活動に留まらず、地域の医療機関との連携にも関わることができればと考えています。あくまで個人的な意見ですが、退院されて在宅療養に移る方に対して、かかりつけの先生や訪問看護師さんが初回訪問される際に同行し、情報共有できればと考えています。

大西：当院は現在、医師会の先生と連携して二人主治医制に取り組みはじめているところですので、かかりつけの先生が当院に来られた際に診療看護師に加わってもらうのも良いかもしれませんね。私自身、お二人の活動を間近で見て、診療看護師の効果と可能性を実感しています。今後も後につづく人が現れ、より良い診療に向けて力を発揮してくれることを期待しています。

Profile

循環器内科部長
大西 正人

滋賀医科大学医学部 卒
2011年7月 循環器内科医長
2015年4月より現職

診療看護師
生田 一幸

東京医療保健大学看護学研究科 卒
2023年1月
東近江総合医療センター 入職
2021年4月より現職

診療看護師
加地 祐哉

行岡医学技術専門学校 卒
大阪医科大学附属病院ICU勤務
東近江総合医療センターHCU勤務
2025年4月より現職

教えて！
東近江総合
医療センター

東近江総合医療センターの

診療科をご紹介

東近江総合医療センターの診療科をご紹介していきます。

脳神経内科

脳神経内科部長
金 一暁

コモンディジーズから神経難病まで総合的な診療を提供

脳神経系の内科疾患は、主に神経自体に異常が生じる疾患と、体内の他の器官の機能低下が神経に影響を及ぼす疾患の2つのタイプに大別され、当院のような総合病院の脳神経内科では、これら両方のタイプに対応することが求められます。当科では総合内科的な診療を基盤としながら、脳神経の内科疾患に対して幅広い診療を行っています。具体的には、頭痛・めまい・しびれなどのコモンディジーズから、パーキンソン病や筋萎縮性側索硬化症をはじめとする神経難病、認知症・脳血管障害・てんかんまで対応しています。

身体的な治療に加えて精神的なサポートも重視

私自身、これまでのキャリアを通じて神経難病に深く携わってきた経験から、治療およびリハビリテーションに関する専門性を有していることが強みのひとつといえます。また、認知症については、アルツハイマー病の根本的な治療薬となり得る薬剤「レカネマブ」の導入が可能です。東近江市内ではレカネマブを取り扱える医療機関は限られているので、当科の特性を活かして患者さんの支えになれればと考えています。

神経難病や認知症の患者さん、ご家族は、大きな喪失感を抱えるケースが少なくありません。このような負担を少しでも軽減するため、身体的治療に加えて精神的なサポートも重視している点が当科の特徴です。

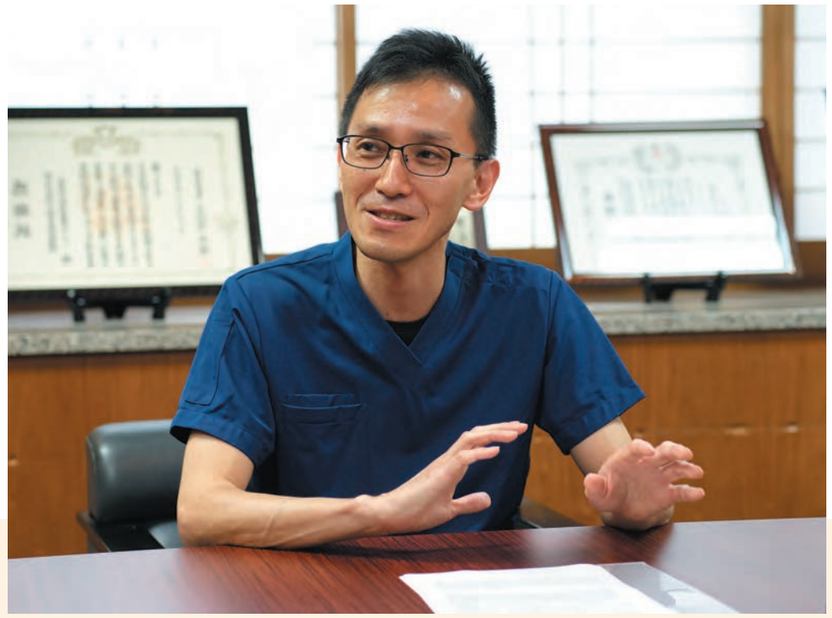
さらに、神経救急疾患については当院の脳神経外科と緊密に連携して、シームレスな治療を実施する体制を整えています。超急性期脳梗塞・脳炎・髄膜炎など、対応がむずかしい場合は、大学病院をはじめとする高度専門機関に迅速に紹介するネットワークを構築しています。

地域の診療体制の充実を目指して開業医の先生方とも連携

東近江市は高齢者の割合が多く、脳血管障害や認知症の患者さんが増えており、今後もさらに増加することが予測されます。しかし、市内には脳神経内科医が常勤している病院が少ないのが現状です。こうした状況においては、発症された方はもちろん、リスクがある方も適切な医療や介護を受けられるように、地域全体で支える環境づくりが必要です。

そのためには、患者さんの日常的な健康管理はかかりつけの先生方にお任せして、入院治療が必要な患者さんを当科が担うといった役割分担が重要となります。これまでも開業医の先生方とは良好な関係を築いてきましたが、さらに連携を深めていければと思っています。コロナ禍以降、直接お話しする機会は少なくなってしまいましたが、できる限りコミュニケーションをとって、地域における脳神経内科の診療体制の充実に努めていきたいと考えています。介をさせていただければと思います。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

小児科



小児科医長
太田 宗樹

入院治療を要するお子さんを中心に幅広い診療に対応

当院の小児科は、地域の医療機関からご紹介いただいたお子さんの入院治療を中心に、医師2名と病棟のスタッフが密に連携し診療を行っています。主に細気管支炎や肺炎などの呼吸器感染症に対する酸素療法や高流量鼻カニュラ酸素療法などの呼吸管理、尿路感染症・リンパ節炎・蜂窩織炎・骨髄炎などの細菌感染症に対する抗菌薬治療、脱水症やケトン性嘔吐症に対する点滴治療、川崎病に対する免疫グロブリン大量療法など、小児にみられる代表的な急性疾患とその治療に幅広く対応しています。

アレルギー疾患に対して個別性の高い検査・治療を実施

近年、少子化が進む一方で、アトピー性皮膚炎や食物アレルギーなどのアレルギー疾患をもつお子さんが増加傾向にあります。乳幼児期に発症したアトピー性皮膚炎や食物アレルギーは、成長と共に気管支喘息やアレルギー性鼻炎など他のアレルギー疾患につながることがあり、このような連鎖的な経過は「アレルギーマーチ」と呼ばれています。

こうした背景を踏まえ、当科ではアレルギー疾患の診療に力を入れており、アトピー性皮膚炎に対する外用療法で改善がみられない難治例については、デュピルマブやネモリズマブなどの生物学的製剤による治療が可能です。

食物アレルギーの治療においては、原因食物を完全に除去し続けるのではなく、必要最低限の除去にとどめ、摂取可能な範囲での経口摂取を継続することで、最終的には制限なく摂取できる状態（耐性の獲得＝治癒）を目指します。ただし、安全に摂取できる量は個人差が大きいため、入院による食物経口負荷試験を実施して適切な摂取量を評価しています。そして、アナフィラキシーなどの重篤な反応にも迅速に対応できる体制を整えています。

産科と連携して安全に分娩を行う体制を強化

当院は東近江市内で唯一の総合病院として、分娩を担う医療機関です。赤ちゃんが健やかに生まれてくることを願う一方で、医療的対応が必要になる場合もあります。そうしたケースに備えて、ご家族の心配や不安を少しでも軽減し、赤ちゃんの健康を守るため、赤ちゃんの状態に応じて小児科医がいつでも対応できる呼び出し体制を整えています。

また、産科を含めたチーム力の高さも大きな強みです。医師や助産師をはじめとする病棟スタッフが緊密に連携して分娩にあたっており、常に知識や対応力の向上に努めています。さらに、小児科医だけでなく、助産師にも新生児蘇生法のインストラクター資格を有するスタッフが複数名在籍しており、チーム全体で安心・安全な分娩を行う体制づくりを進めています。加えて、開業医の先生方との連携にも、これまで以上に力を入れて取り組んでまいります。

教えて！
東近江総合
医療センター

各部門のお仕事がより分かる！

東近江総合医療センターの部門紹介

今回ご紹介する部門は

ME室

ME室ってどんなところですか？

臨床工学技士は生命維持管理装置の操作や保守点検を業務として行う職種です。当院では臨床技術提供業務として血液浄化療法、心臓血管カテーテル治療、ペースメーカー治療、自己血回収術、補助循環療法、高気圧酸素治療などの機器操作を担当し、保守点検業務として除細動器や輸液ポンプを始め院内全体の機器管理を担当しています。また、使用中の人工呼吸器について日々のラウンドチェックを行い動作異常がないかを確認し医療安全の確保に努めています。

当院の特徴として、県内では早期に高気圧酸素治療室を立ち上げたことが挙げられます。2020年9月から開始し2000件以上実施してきました。その中でも治療効果が顕著であった疾患を紹介します。従来の治療では治癒が見込めなかったもの、従来と比べ治療期間を大幅に短縮できたものなどが含まれます。患者様に大きな有益性をもたらす本治療を広く認知していただき、他施設にも活用していただけるよう努めてまいります。

治療効果が顕著であった疾患一覧

皮膚科
下肢うっ滞性皮膚潰瘍、下腿3度熱傷、蜂窩織炎、ASOに伴う皮膚潰瘍など様々な症例

外科
膵頭部癌に対する化学療法併用、麻痺性イレウス、術後創部感染症

泌尿器科
放射線性膀胱出血、放射線性直腸出血

耳鼻科
突発性難聴

内科
レイノー病

整形外科
下腿多発性潰瘍

糖尿病内科
強皮症、難治性潰瘍を伴う末梢循環障害

小児科
化膿性筋炎、骨髄炎

歯科口腔外科
顎骨骨髄炎

救急科
急性一酸化炭素中毒

連携室だより　当センターからのお知らせをお届けします。

『在宅医療相談会』はじめました

「近頃、病院に通うのがつらくなってきた」、「在宅医療に興味があるけど、誰に相談していいかわからない」そんな悩みをお持ちの方はいらっしゃいませんか。
そのお悩みは、「かかりつけ医」を持っていただくことで解消するかもしれません。

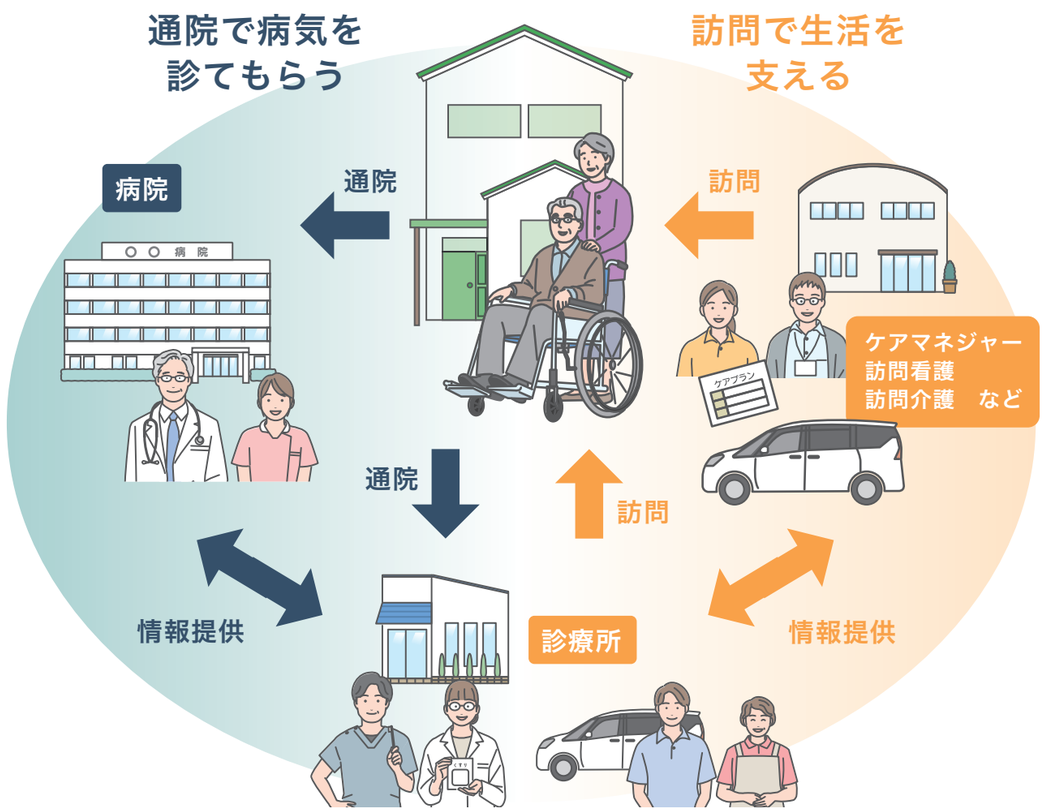
「かかりつけ医」とは、患者さんの身近にいて、日頃から健康相談を行ったり、病気になったときには最初の診断治療を行う医師のことです。

東近江医師会では、「病院医師」と開業医等による「かかりつけ医」のふたりが主治医になり、「かかりつけ医」が病気の治療だけでなく生活上の課題や日頃の健康管理について気軽な診察・相談先になるという「ふたり主治医制」を推奨しております。
当院では東近江医師会との協力のもと、この「ふたり主治医制」を皆さまに広く活用していただけるよう『在宅医療相談会』をはじめました。

高齢になりいくつもの診療科を受診している方や、医療だけでなく介護・福祉・地域活動などの支援や連携が必要となる方などは特に、在宅医療を含めた支援を行うことができる「かかりつけ医」を持つことで通院の回数を減らし、より安心して生活ができるようになることが期待できます。
本相談会では、実際に在宅医療に携わっている東近江医師会の医師が、「かかりつけ医」についての話や在宅医療についての不安や疑問について個別に相談をお受けいたします。
「在宅医療でどこまでの治療をしてもらえるのか？」「費用はどれくらいかかるのか？」「自分の住むところまで往診にきてくれるのか？」など、どのようなご相談でも結構です。

このように病院の中で、病院スタッフでなく地域の開業医が、在宅医療についての相談会を行うことは全国的にも非常に珍しい試みです。地域の皆様がよりよい医療を選択するための、情報収集や相談の場としてぜひお気軽にご利用ください。

相談会は、毎月第2水曜日の14:00～16:00の間で行っております。

対象者は当院に現在通院中または入院中の患者さんとそのご家族の方、費用は無料ですが完全予約制のため、事前のご予約が必要です。

ご予約を希望される方は、外来時に主治医へ「在宅外来相談を受けたい」とお伝えいただくか、地域医療連携室へお問い合わせください。